媒体名	スポーツニッポン	版／面	第　9版／　14面	掲載日	2026年3月11日（水）

海外にも伝えたい…日英2言語で"震災復興新聞"を制作

神田外語大生

現地でフィールドワーク「光と影」に向き合った1年間

（下）内堀雅雄福島県知事（前列中央）らと記念撮影をする神田外語大の生徒　（右下）（上から）オリジナルビール「綺麗ＡＬＥ」、震災復興ビール仕込み式の様子

1月に福島県庁を訪問 新聞とビールを贈呈

○…1月には学生らが福島県庁を訪問。完成した震災復興新聞を内堀雅雄県知事に手渡し、意見交換した。贈呈式では新聞とともに、広野町産のバナナを原材料にして造ったビールもプレゼント。さらに今月4日には復興庁を訪れ、新聞と震災復興ビールを贈呈。学生の取材と学びの成果を瀬戸隆一復興副大臣＝顔写真＝に届けた。

広野町産バナナを原材料にしたビール造りも

綺麗ＡＬＥ

○…オリジナルビールも造りも行った。昨年11月「震災復興ビール仕込み式」を羽田スカイブルーイングで行い、福島県広野町産のバナナを原材料にしたビールが披露された。ビール製作リーダーの関口舜矢さんが「ビールを手にした人たちが福島に寄り添う気持ちになってくれたらうれしい」とスピーチし、式では神田外語大グループの佐野元泰理事長らが釜に麦芽を入れた。ビールは「綺麗ＡＬＥ」と命名され、ラベルも「ＡＬＥ」と書かれ、好評だった。

学生がデザイン。「福島の実りと願いから生まれた」、「Rise with Fukushima」と書か

福島の「今」を世界に発信

「語り部」で元養護教諭の永岡富紀子さん ▼▼

震災復興の現状を世界へ発信―。神田外語大の柴田真一ゼミに所属する学生19人が、約1年をかけて震災復興を伝える取り組みを行った。神田外語グループは23年9月に福島県と包括連携協定を締結しており、今回の活動はその中核を担うもの。学生は、福島視察や復興ビールの企画開発、日本語版と英語版の震災復興新聞を作り、状況を国内外に発信した。

15年の節目

震災から15年の節目に〝大学生目線〟で復興状況が伝えられた。

「震災復興発信プロジェクト」の課題に取り組んだ学生は、柴田真一特任教授のゼミに所属する19人。ビジネス英語を専門とする柴田教授の指導の下、精力的に活動した。

昨年8月には、フィールドワークとして9人が福島を訪問。1日目は「福島の過去と現在」について学びを深めた。双葉町の東日本大震災・原子力災害伝承館では災害の実態を痛感。特に「語り部」である元養護教諭の永岡富紀子さんによる講話に心を震わせた。

「震災復興新聞」の英語版（左）と日本語版（右）

「原発事故が学校にもたらしたもの」と題してマイクを握り「今でも思い出したくないという人は多くいる。それでも、語ることができる人が語らないといけない」と永岡さん。相馬農高での授業や避難生活、誹謗中傷などのエピソードに触れ、涙を流す学生もいた。

永岡さんの「〝自分ごと〟として関心を持ち、事故が二度と起きない社会をつくってほしい」という言葉を受け、決意を新たにした。その後は復興支援の拠点となったJヴィレッジに宿泊し、地元産の米や野菜、魚を食べた。

2日目は、3グループに分かれ、研究教育施設や企業を訪問し、熱心に話を聞いた。大熊町の中間貯蔵事業情報センター、相馬市の福島ロボットテストフィールド、浪江町の福島水素エネルギー研究フィールド、會澤高圧コンクリート福島RDMセンターなどを訪れて先端技術に触れたほか、「特産品」や「人口拡大・地域振興」をテーマに学習。メモや写真を撮りながら、現状を取材した。

11年当時は幼稚園生や小学生だった大学生たちは感銘を受けた様子で、ゼミ長の関口椋久さんは「多くの人に話を聞き、福島の現状を理解するのに役だった」と振り返った。福島出身の山本悠加さんは「〝福島から世界を変えたい〟という言葉が印象に残っている。福島が頑張っていること、それが世界にどう生きるのかを新聞で伝えたい」と語った。

昨年8月、フィールドワークを行った神田外語大・柴田真一特任教授（前列右から3人目）とゼミ生

柴田教授 活動を振り返り「震災をあまり知らない世代の学生が伝えることは付加価値があると思う」

その言葉通り、学生たちは日英版を制作。特に英語版は日本語版の直訳ではなく、読み手に届く表現にしようと工夫した。先月17日には提携するインドネシアのプティ・ルフール大学に向けてオンラインプレゼン。英語でコミュニケーションし、世界に情報を届けた。

柴田教授は1年間の活動に感慨深げ。プロジェクトのタイトルを「福島の光と影」にしたことに触れ「学生たちは新聞作りは初めてで、フィールドワークも最初は戸惑ったかもしれないが、人々の思いを直接聞けた意味は大きい。震災をあまり知らない世代の学生が伝えることは付加価値があると思う」と語った。

復興へ意欲的に取り組む人たちと向き合った約1年間。素朴で素直な視点で発信したことで、多くの共感を得られたはずだ。

※無断で複製・転載することを禁じます